

英語の基礎学力について

野村 夏治

Minimum Competency of English Observed among High School Students

Natsuji NOMURA

はじめに

長年英語教育に携わった者として英語の基礎学力とは何かということを経験を長い間考えてきているのであるが、その中で主に表現力(発表力)について評価の面から、標準的な学力テストについての資料などを参考にして考えてみたい。

一般に考えられている英語の能力は「聞く」「話す」「読む」「書く」のいわゆる4技能である。この4技能は、中学校指導書¹⁾には、「聞くこと、話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の3領域として示されていて、この学習活動を行なうための初歩的な英語の言語材料として、音声、文、句型、語及び連語、文法事項、文字及び符号があげられている。言語は音声と文字という点からとらえられるが、また、言語は音声と語いと文法から成り立っていると考えることもできる。英語の学力をこの三つの観点からとらえる研究が進められている。

小中学校の学習指導要領が昭和52年に改訂されたが、国語教育の骨子は「言語活動中心から言語能力中心へ」というものである。言語には、聞く・話す・読む・書くという4技能があるが、この活動が言語活動で、言語能力は具体的に生きて働く国語の力全体を指すという。そのねらいは、学習者が、意味ある内容を正確に生き生きと言語で表現し、表現したものを正確に深く理解する力を統一的にもつようにすることであるようだ。できるだけこのような統合的な言語能力をもつことは英語教育においても望ましいことである。

教科にはそれぞれの目標とそれを達成するための独自の学習活動があって、それぞれの特色をもっている。英語科は比較的似ていると考えられる国語科と比べてみても大きな違いがある。英語の学習では未知の音韻組織の習得のために費やされる時間がきわめて多く、また、母国語とは全く異なる表現形式によって自己表現させるには大きな労力を要する。大意の把握などの高度の学習は国語科に比べればその質と量において格段の違いがある。設定されている目標は本質上はきわめて類似しているようにみえても、その学習の内容には大きな違いがある。

英語では、学力を総合的にとらえようとするれば、音声を重視しなければならない。英語科の技能と考えられるもののなかには、コミュニケーションを行なうことができる技能(社会的技能と考えられる)がふくまれる。

音声の評価に関する諸問題

普通 LL などによって行なわれる聞く力の評価方法としては、音声を識別させる aural perception と、意味を識別させる listening comprehension がある。これらの方法に書く作業を加え、例えば英語の問いに答えを選択させるとか、長文を聞いてその要点を書かせるとかの方法もある。総合的な英語の力を調べる方法として書取 (dictation) がある。そのほか、生徒の発音を録音して指導し、評価する方法もある。アメリカで試みられているグループ指導では、生徒の声を録音してすぐ再生し、効果を上げている²⁾ ということである。

話すことを評価する方法に観察法がある。教師がチェック・カードを用いて項目ごとにチェックした記録を累積する方法である。これはすぐれた方法であるが、もし面接して実施すれば手間がかかりすぎる。観察法は主観的な方法であるから、客観的に点数化しにくい。観察者の見る目が訓練されていることが必要であって、もしそうでないと結果は信頼できるデータとはなりえない。

観察法で評価を行なうには、話す基礎として、1 総合的に理解できる話しぶりであるか 2 発音 (音節、音素) 3 語のアクセント、抑揚、文の強勢、文の区切り (休止または接続)、自然な速さとリズムなどのいわゆるかぶせ音素の項目について観察し、記録するのが望ましい。対話文や会話文の一部や passage などを見せて話し方を調べる方法もある。

面接する生徒にその場でカードを渡して黙読させ、その後音読させてからその内容について英問英答を行なって会話力をみる「英検」方式は、あまりに controlled conversation にすぎるといふ欠点があるが、全国一斉に実施して、多数の観察者の主観による評価の差が出るのを少なくするために考え出された一つのすぐれた方法であろう。しかし、この方法も公平を期するためにカードを回収し、面接終了者をこれから行なう者と接触させないように手だてを講じる必要があり、また、カードは数枚用意して内容と設問を同程度にするなどの労力は大きい。

大学入試では、英語専攻者にはヒアリングか書取を課し、英語による面接を実施している大学もある。高校入試では、「高校入試における音声テスト調査研究 (第 24 回 LLA 全国研究大会報告)」によると、相当数の県で高校入試に音声テストが実施されている。例えば、宮城県では 40 分の英語テストのうち開始時の 8 分が音声テストに当てられているが、これはまとまった内容を聞かせて英語で質問し、その答えを選択させるもので、一般的な形式のものである。英語教育研究団体が行なう全県、全国レベルの学力でもテープによる数分間のヒアリング・テストが行なわれている。

音声重視の立場から、この広域テストでは、ヒアリングのほかに発音に関する問題がペーパー・テストの一部として出題されている。これは発音の知識に関する問題であって、発音そのものが実際に聞き取れるか、発音に通じるかは無視されているが、やむをえない措置であろう。発音について出題しようとする場合いくつもの考慮すべき制約があり、また、ペーパーによる出題に対する批判もある。「音声テストとペーパー・テスト」についての研究³⁾ によれば、大学入試におけるペーパー・テストのアクセントの問題と listening test および総合点相互の相関はどれもほとんどなく、特に、アクセントと聞きとりテストとの相関は 0.12 で一番低いという。また、大学入試に基づいたある研究⁴⁾ では、ペーパー・テストによる英語学力相互の関係において比較的高い相関係数があると考えられるのは、単語と発音 (0.583)、訳と単語 (0.506)、訳と和英 (0.431) であるという。この相互関係はもっと研究する必要がある。

学力とは何か

学力という言葉は一般に広義に用いられていて、その定義は立場によって異なるが、教育心理学新辞典⁶⁾には学力は次のように規定されている。

「一般に学習により獲得された能力をいう。したがって知識や技能の程度とともに新しいことを学んでいく能力という意味を含む。(中略)以上からわかるように、学力概念は社会の進歩に即応し貢献できるという社会的・歴史的観点を必要とすると同時に、その心理学的構造が問題とされる。心理学的には、読解力、作文力のように経験内容に基づく分類と、知識・理解のような能力概念による分類がある」。

文部省は昭和38年2月に能力開発研究所を設立して能研テストを実施したが、その報告書⁶⁾では、学力を「後天的に学習して得られる能力」と定義している。それに加えて、今までの学力に対する考え方には、およそ、次の三つがあるようだ、と述べている。

1. 既成の客観的体系的な知識・技能をおもな学力と考えるもの
2. 実際の社会生活上に生きてはたらく知識・技能を主とするもの
3. 学力は知識・技能そのものよりはむしろ問題解決的な態度・能力を重視するもの

教育学大事典⁷⁾には、「学力の概念は、一義的に規定されうるような教育的なコンセンサスはまだ確立していない」とあり、学力の一般的な概念規定としては、「学習によって獲得される能力」「生徒の学業成績としてあらわされる個人および集団の能力」とある。この集団の能力を測定するためのテストが標準学力テストである。学習の成果の測定テストは achievement test と呼ばれ、アチーブメントは「達成した能力」を表わす。数学の学力の国際比較調査で知られる IEA (教育達成度の評価に関する国際協会) の A という文字はこのアチーブメントであり、(教育)達成度と訳されているが、これは学力に相当する。現在では、到達度という用語は、形成的評価の観点から使用されるようになってきている。

学力という日本語に直接対応する言葉はヨーロッパ系の言語には存在しないように思われる。上に引用した教育学大事典、教育心理学新辞典には achievement が学力とされていて、文部省の学力調査は achievement test と訳されている。教育学の英語の文献には competency test という用語がみられるが、能力テストであろう。チヨムスキーの competence という用語は「言語能力」と訳されている。なお、標準学力テストと同じ考え方のものに proficiency test がある。これは、指導したある期間の特定の学習内容ではなくて、一般にこれまでどの程度英語を習得したかを評価するものであって、しばしば資格試験的な意味をもつ。

学力の定義のしめくりとして、再度教育学大事典から引用したい。それには、学校教育が「学校的能力」として児童生徒に形成することを目的とする人間的能力の総体を広義の「学力」として把握し、その中軸に位置づくものとして「認識能力」(知的能力)を狭義の「学力」として把握することが適切である、と述べられていて、人間的能力を認識能力、表現能力、社会的能力(人格的諸特性)と分類し、表現能力を感応、表現の能力、身体的能力、労働の能力としている。

学力評価の視点

英語科の学力評価においては、一般的には、発音は一応別として、語い、文型、文法事項などの言語材料は総合的に「読むこと」「書くこと」のテストの中に包含された形で出題される。これは、語い、文型、文法事項の運用能力(知識、思考力など)は「読むこと」「書くこと」(「聞

くこと、話すこと」についても)の前提となる、という考え方に基づいている。

学習活動に用いられた言語材料と指導目標を組み合わせた評価についてのマトリックスの中学校第1学年の一例⁸⁾を次にあげてみよう。

評価項目……A 音声 B 文字 C be動詞(7項目) D 一般動詞(5項目) E 助動詞(3項目) F 命令文(2項目) G 基本語 H 基本連語

観点項目(項目ごとに上記の言語材料にチェックして一覧表にまとめる)

1. 聞くこと

- ・語や文を聞いてその内容を理解できる。
- ・身近なことを聞いてその内容がわかる。
- ・実物、絵、写真などを見ながら聞いて理解できる。
- ・指示された英語を聞いて動作ができる。
- ・対話文を聞いてその内容が理解できる。
- ・放送、録音等の英語を聞き取ることができる。

2. 話すこと

- ・日常慣用のあいさつをかわすことができる。
- ・身近なことについて話することができる。
- ・身近なことについて尋ねることができる。

3. 読むこと

- ・語のアクセントに注意して音読できる。
- ・文中の語句の関係を理解して読むことができる。
- ・抑揚をつけて音読できる。
- ・まとまりのある数個の文を読んで内容を理解することができる。
- ・文を正しく区切って音読できる。
- ・語句の意味に注意して読むことができる。

4. 書くこと

- ・アルファベットを正しく書くことができる。
- ・語、句及び文を見て書き写すことができる。
- ・語、句及び文を聞いて書き取ることができる。
- ・身近なことについて簡単な文を書くことができる。

5. 態度

- ・外国語を使ってコミュニケーションをする態度を身につけている。

この中で注目したいのはコミュニケーションをする態度である。なお、「読むこと」のうち「音読できる」という項目は「話すこと」と関連が深いことはいうまでもない。

水越敏行は、学科の授業の目標⁹⁾として、1 知識(A 基礎的知識, I 概念, 原理, 法則) 2 思考力(A 学び方, 調べ方 I 応用力, 構想力) 3 技能(A 観察, 測定, 操作, 制作, I コミュニケーション) 4 情意(A 集中力, 協調性 I 学習意欲 U 自己概念, 自信)をあげている。英語の学習では思考力を高めるための学習活動が他教科と比べると少ない。日本語の助けを借りて考えるのは英語科の目標ではない。英語科では英語の運用能力、コミュニケーションの技能と態度を養うことが目標である。しかし、英語科でも、学力評価の視点を知識、理解(思考力)、技能、情意という方向にも置くことが必要である。W. J. MooreとL. D. Kennedyの論文(language artsの学習の評価を扱っている)では、音声、語い、文法、4技能等を縦軸とし、行動を横軸としていて、行動は認識行動(知識・理解・分析・応用・評価)と情意的行動(態度・受容・関与、意欲)とに分類している。¹⁰⁾つまり、英語の学習においては、興

味, 関心, 学習意欲, 自信という情意面がきわめて重要な要素であると考えなければならないということである。

文の強勢について

名古屋市立中学校及び愛知県高等学校の両英語教育研究会は毎年問題を作成し, 中学校は全学年 11 月に, 高校は新入生に対し 4 月にテストを実施している。以下ペーパー・テストだけについて考察するが, まず「文の中の強勢のある語を識別する問題」を取り上げてみよう。これはペーパー・テストによる問題であるから「読むこと」の領域にはいると考えられる。

対象: 名古屋市立中学校第 2 学年

(昭和 58 年度問題)

次の(a)~(c)の問答をするとき, それぞれの答えの文の下線部の中で最も強く発音する語を一つずつ選び, その番号を書きなさい。

(a) How many students are there in the classroom?

There are forty students here.

(正答率 75.6%)

1 2 3 4 5

(b) What subjects did you study last night?

I studied history last night.

(正答率 69.6%)

1 2 3 4 5

(c) Who is taller, Nancy or Mike?

Mike is taller than Nancy.

(正答率 42.5%)

1 2 3 4 5

正答率は上記の通りで, 出題(小問 50 題)全部の順位は順に 3, 7, 31 であり, (a), (b)はやさしい。(c)では, 誤答の 3 が 26%, 4 が 15%, 5 が 14% ある。文頭の語に強勢をおく文は生徒にはなじみがうすいのであろう。¹¹⁾

(昭和 57 年度問題) (日本語の指示は省略) ((c)は省略)

(a) Who's younger, Nancy or Mike?

Nancy is younger than Mike.

(正答率 40.7%, 順位 46 位)

1 2 3 4 5

(b) How old is your brother?

He is eleven years old.

(正答率 79.0%, 順位 10 位)

1 2 3 4 5

(a)の成績がよくなかったので, 次年度にも出題されているが, とともに 40% 台である。¹²⁾

文を区切って読む力

これは修飾語句があるため主部が長くなっている文, 従属接続詞を含む文を区切って読む問題で, 途中で自然なポーズをどこにおくかを調べるものである。

対象: 名古屋市立中学校第 3 学年

(昭和 58 年度問題)

次の各文を途中で 1 か所区切って読むとすれば, どこで区切れればよいですか。1 ~ 5の中から適当なものを一つずつ選び, その番号を書きなさい。

(a) I hope₁ that₂ Jane will₃ get well₄ in₅ a few days.

(正答率 35.9%, 45 位)

(b) The tree₁ that₂ stands₃ in front of₄ the house₅ is very old.

(正答率 57.8%, 33 位)

(c) Tom₁ has wanted₂ to visit Nagoya₃ since₄ he came₅ to Japan.

(正答率 78.3%, 8 位)

(a)が予想外に正答率が低く、¹³⁾ 誤答の 2 が 32%ある。教科書では I think / (that) Jane will come soon. が基本文として示されているから出題されたのであろうが、これはポーズを調べる問題としては適当ではない。稲村松雄は、「中にはあまり短い文で、くぎることが適切でない文、くぎるにしても個人差のある文(例: That is why I want to study science.)が出題されることがあって、しばしば物議をかもす。I think that learning is very important.にしても、自然の対話では、I think that でくぎって、次の発言を考える場合がしばしばある」¹⁴⁾ と述べている。

(昭和 57 年度問題) (日本語の指示は省略)

(a) All₁ the girls₂ who went₃ there₄ wanted₅ to see him. (正答率 17.7%, 49 位)

(b) Masao had₁ to do₂ his homework₃ before₄ he went₅ to bed.

(正答率 68.6%, 12 位)

(c) The camera₁ I want₂ to₃ buy₄ is₅ very expensive. (正答率 35.5%, 41 位)

(c)は接触節を含み、主語が 6 語から成り立つことが理解されていない。(a)の場合 who の前で区切った生徒が 82%あるが、I know the boy / who came here yesterday. を習っていて、who の前で区切ることを知っているため、(a)の意味全体をよく考えなかったためと考えられる。¹⁵⁾

(昭和 56 年度問題)

(a) The friend₁ I want₂ to see₃ lives₄ in₅ this city. (正答率 27.1%, 42 位)

(b) The rising sun₁ seen₂ from the top of₃ Mt. Fuji₄ is₅ very beautiful.

(正答率 60.8%, 24 位)

(a)は接触節で再度出題されている。1 で区切った者が圧倒的に多く、4 は 13%である。¹⁶⁾ この区切りの問題は「息の段落 (breath group) に関する問題であるが、以上の成績からうかがえるように、実際には内容の理解を調べる問題と大きな違いはない、といえよう。

文部省は能研テスト(昭和 38 年度第 1 回)に先立って全国の国公立高等学校の生徒を対象に各教科の実態調査を実施した。国語、数学は昭和 31, 34 年、理科、社会は昭和 32, 35 年、英語は昭和 33, 36 年実施された。昭和 37 年は 11 月に全日制第 3 学年、定時制第 4 学年生徒の約 2 割を抽出し、国語、数学を半数ずつに課して調査した。対象はそれぞれ全日制が約 54,000 人、定時制が約 9,500 人であった。¹⁷⁾

そのうち、英語では、放送を利用して「聞き方」テストが行なわれ、「話し方」は語を発音する能力、語をアクセントをつけて発音する能力、文をくぎって読む能力を調査する、と領域構成の趣旨が述べられている。(文を区切って読むはここでは話し方にはいっている)。

(昭和 33 年度問題) (日本語の指示は省略。途中 1 回区切るが、(c)は省略)¹⁸⁾

(a) I₁ was₂ quite₃ at₄ a₅ loss₆ which₇ way₈ to₉ go. (正答と正答率 6, 93.0%)

(b) I₁ tried₂ in₃ vain₄ to₅ solve₆ the₇ problem. (正答と正答率 4, 77.3%)

高校最上学年の問題としてはやさしかったことが分かる。正しく区切って読むには、語句と語句の意味上の関係を正しくとらえて読むことができなければならない。

英文構成力(語句を正しく並べかえる力)について

文を書く力を測定しようとするれば、その文において用いられる構文が再構成されることができるといふことと、それに用いられる単語のつづりまで書けるかといふことの二面を合わせて調べなければならない。つづりの問題は普通語の問題として扱われ、構文力を調べるには与えられた日本文の意味を表わすように語句を並べかえさせる整序問題がよく出題される。

対象：全国高等学校 全日制第3学年，定時制第4学年

(昭和33年問題 文部省テスト)

次の各組の語句を並べかえて、かっこ内に示された意味を表わす英文を作りなさい。

(a) 1 the poet 2 where 3 the village 4 this is 5 was born

(ここはその詩人が生まれた村です)

(b) 1 this box 2 what 3 is 4 made of 5 do you think

(この箱は何でできていると思いますか)

(c) 1 walk 2 every morning 3 it 4 I make 5 a rule

6 to take

(私は毎朝散歩することにしてます)

正答率は、(a)全日制 72.3%，定時制 32.5% (b)全 48.4%，定 14.0% (c)全 28.0%，定 7.9% であった。(b)、(c)は高校での学習事項であるが、(c)は予想外に悪い。なお、英語全体平均は15単位以上履修者の全日制 49.4点，定時制 24.0点，15単位未満者(初修用を除く)の全日制 31.1点，定時制 17.0点である。¹⁹⁾

対象：愛知県公立高等学校第1学年

(昭和58年度問題 4月実施)

次の(1)~(5)の日本文の意味を表わすように、下に与えられた語を全部用いて、英文を作りなさい。

(1) 駅までの道を教えてください。(正答率 72.2%)

me, station, tell, the, the, to, way, will, you

全日制のみ。以下同じ。

(2) 私がきのう会った少年は公園の近くに住んでいます。(正答率 34.6%)

boy, I, lives, met, near, park, the, the, yesterday

(3) 頂上から見える日の出は美しい。(正答率 42.5%)

beautiful, from, is, rising, seen, sun, the, the, top

(4) 朝食前に散歩することは良いことです。(正答率 50.1%)

a, before, breakfast, good, is, it, take, to, walk

(5) アメリカは日本のおよそ25倍の大きさです。(正答率 44.2%)

about, America, as, as, is, Japan, large, times, twenty-five

この5問の平均は48.7点である。²⁰⁾ (2)は、主語に接触節の後置修飾を伴う問題、(3)は、過去分詞の後置修飾の問題(前出の中3の区切りでは60.8%)であって、ともに生徒には理解しにくい事項である。なお、羽鳥博愛²¹⁾は、現在分詞の後置修飾を次の二つのタイプに分けて、どちらが聞いて理解しやすいかを調べているが、Bが聞きやすいと言う。Aでは、主語と述語動詞が離れていてとらえにくいのが、Bでは、両者が続いているから理解しやすい。

Aタイプ The boy running in the garden is Tom. (主語の場合)

Bタイプ I know the boy running in the garden. (目的語や補語の場合)

(昭和 57 年度問題)

- (1) 私の家は駅からそんなに遠くありません。 (正答率 77.1%)
far, from, house, is, my, not, so, station, the
- (2) 春夫君にはロンドンに住んでいるペンパルがいます。 (正答率 81.2%)
a, Haruo, has, in, living, London, pen, pal
- (3) 昨日あなたが買った本を私にみせてください。 (正答率 58.6%)
book, bought, me, show, the, yesterday, you
- (4) 母は私にテレビをみるのをやめるように言った。 (正答率 69.0%)
me, mother, stop, television, to, told, watching
- (5) 私が京都を訪れるのは今回が初めてです。 (正答率 49.6%)
first, is, Kyoto, my, this, to, visit <5 問平均 67.1%>

(3)は接触節を伴う問題で正答率は毎年低い。参考に3年間の問題をあげると、56年度「私のとまったホテルはたいへん近代的でした」51.1%，55年度「マイクの昨年買ったカメラはたいへん高価です」46.2%，54年度「これはジェーンが作ったケーキです」41.7%である。²²⁾

接触節という高度の知識と理解を要する事項については、区切って読むことから調査しても、構成力から調査しても大きな違いはないと考えられる。中3の区切って読む力(p. 5)と高1の構成力とを比べると、実施時期に6か月の間隔があるだけで、しかも前者は義務教育で後者は公立高校入学者だけであるから、後者の正答率が幾分高くて当然であろう。

対象：名古屋市立中学校第3学年

(昭和 58 年問題 11 月実施)

- (a) 私はその本を読む時間がありません。 (正答率 60.7%，28 位)
I have (1. the book 2. time 3. no 4. read 5. to).
- (b) 向こうでテニスをしている少女はナンシーです。 (正答率 49.7%，39 位)
The girl (1. tennis 2. is 3. playing 4. over there 5. Nancy).
- (c) 彼は忙しすぎて泳ぎに行くことができなかった。 (正答率 58.8%，31 位)
He was (1. swimming 2. too 3. to 4. busy 5. go).
- (d) これはあの川でとれた魚です。 (正答率 32.5%，47 位)
This is (1. river 2. the fish 3. in 4. caught 5. that).

50 問中の順位は上記の通りである。²³⁾ (b)と(d)の現在分詞，過去分詞の後置修飾が生徒には理解しにくいことがここにも表われている。

(昭和 57 年度問題)

- (a) カナダでは、何語が話されていますか。 (正答率 36.0%，40 位)
(1. Canade 2. is 3. in 4. what 5. spoken 6. language) ?
- (b) あなたは、タイタニック号のことを聞いたことがありますか。 (正答率 61.0%，22 位)
(1. Titanic 2. have 3. heard 4. ever 5. you 6. the 7. of) ?
- (c) あなたが会いたがっている女の子は、ここに住んでいます。 (正答率 31.9%，45 位)
(1. the 2. to 3. lives 4. you 5. want 6. girl 7. see 8. here).
- (d) わたくしは、青い目をした人形を持っています。 (正答率 63.8%，16 位)
(1. eyes 2. doll 3. a 4. I 5. have 6. blue 7. has 8. which).

(c)は接触節の問題であり、(a)は疑問詞によって導かれる疑問文の受動態であって、理解すべき項目が多いために正答率が低いと思われる。²⁴⁾

おわりに

われわれがもっている言語使用能力は、今まで耳にしたことがない新しい文を聞いて理解する能力であり、また、必要に応じて全く新しい文を作り出すことができる能力である。言語における創造性と言ってもよい。英語教育においても、そのめざすものはその言語使用能力の獲得であり、さまざまな言語活動によって、学習した事柄を真に自らの知識の一部として習得し、状況に応じて具体的な、意味ある内容を考え出して、それを適確に表現できる、生きて働く英語の総合的な使用能力を作り出すことである。

言語の本質的な部分をなすものとして、音声・文法(文の構造、文の構成)・意味という三つの部門を認めることができるが、人間の言語使用能力を解明した Noam Chomsky は、「言語能力」(competence)と「言語運用」(performance)を設定し、その「言語能力」の解明にあたって、「文の構成」(sentence formation)に関する事柄が中核的存在をなしているとしている。²⁵⁾ところで、場(situation)に応じて、具体的にこの「文の構成」がどのように産出され、記憶され、認知、理解されるかは「言語運用」に関する分野である。文の記憶と認知についても、いろいろな実験がなされてきている。

学力の構造を考えるにあたって、上記の立場に立って、「文の構成」に関する事柄に関係があると思われることをここに挙げたのである。いわゆる核文(kernel sentence)としては、関係詞の接触節を中心にして、現在分詞及び過去分詞による後置修飾語を伴って主語(または目的語、補語)が長くなっている文を取り扱っている。この重要な学習事項が生徒の基本的な知識となり、発展的に生きて働く知的理解力に高められて、未習の接触節を含む類似の文型をも学び取る(認知学習、あるいは発見学習する)ことができるようになるということは一つの学力であると言える。

接触節を含む文の考察にあたって、「文を区切って読む」力と、並べかえによる書く力としての「文の構成力」とを調べる問題を取り上げたが、だいたい同程度の数値であり、読む(話す)力と書く力(つづりの能力は除外されている)とが並行していることが分かる。これは取り上げた文型が高度の認知・理解を要するものであるからであろう。なお、中3と高1とでほとんど変わらない結果が出ているが、これはテストを実施した時期が6か月しかへだたっていないからであろう。学年が進むにつれて成績が向上しないで、どのテストでも似ている結果しか出ないが、これは、その文型に用いられている語いが少しずつ高度となり、修飾語句もいくらか長くなっていくためであろうと考えられる。このことは、英語の学習にあたって、新しい語いの習得が大きな比重をもっていることを示しているのかもしれない。文の構造が簡単な場合でも、その文に用いられている語いがむずかしい場合には、生徒には理解しにくい、と考えることができよう。

以上の数少ない文型による考察だけでは学力の構造をとらえることはできないが、書くことと読む(話す)ことの両面から同一の問題を調べることによって、英語科の学習における認知理解の一つの働きについて知ることができたのではないかと思う。

注

- 1) 文部省：中学校指導書(外国語編)，6，開隆堂(1978)
- 2) 米山朝二，佐野正之：新しい英語科教育法，62，大修館(1983)
- 3) 羽鳥博愛他：学習者中心の英語教育，155，大修館(1981)

- 4) 羽鳥博愛：英語学習の心理, 94, 研究社(1970)
- 5) 牛島義友他：教育心理学新辞典, 113, 金子書房(1978)
- 6) 文部省実施高校学力テスト問題, 7, 教育出版(1963)
- 7) 細谷俊夫他：教育学大事典, I, 314, 第一法規(1978)
- 8) 名中英研会誌, 21, 6, 名古屋市立中学校英語教育研究会(1984)
- 9) 水越敏行：授業評価研究入門, 118, 明治図書(1982)
- 10) 永野重史編：講座 英語教育工学, II, 125, 126, 研究社(1975)
- 11) 前出(名中英研会誌, 21) 31
- 12) 名中英研会誌, 20, 30, (1983)
- 13) 前出(名中英研会誌, 21) 38
- 14) 稲村松雄：評価と測定, 111, 研究社(1970)
- 15) 前出(名中英研会誌, 20) 39
- 16) 名中英研会誌, 19, 39(1982)
- 17) 前出(高校学力テスト問題) 23
- 18) 同上, 173
- 19) 同上, 192
- 20) 中・高等学校生徒の学力に関する研究, 76, 愛知県教育センター(1983)
- 21) 前出(学習者中心の英語教育) 156
- 22) 中・高等学校生徒の学力に関する研究, 70, 愛知県教育センター(1982)
- 23) 前出(名中英研会誌, 21) 36
- 24) 前出(名中英研会誌, 20) 38
- 25) 安井稔：変形文法の輪郭, 33, 大修館(1970)